

知事訪米の概要 (平成30年11月)

平成30年度
沖縄県知事公室

—目次—

1	訪米概要	1
2	訪米日程	2
3	訪米団員名簿	3
4	活動の概要	
	(1) NY 大学 知事講演「多様性の力、民主主義の誇り」	5
	(2) 中満泉国連事務次長面談	6
	(3) マイケル・オハンロン氏面談	6
	(4) シーラ・スミス氏面談	7
	(5) マイク・モチヅキ教授面談	7
	(6) 連邦政府要人面談	7
	(7) マーク・マーニン氏面談	8
	(8) メイジー・ヒロノ上院議員面談	8
	(9) ディビット・プライス下院議員面談	8
5	NY 大学 知事講演「多様性の力、民主主義の誇り」全文	9

1 訪米概要

(1) 目的及び概要

玉城知事が、辺野古に新基地を造らせないことを公約に掲げ、沖縄県知事選挙において過去最多得票で当選したこと、沖縄の過重な米軍基地負担の現状などについて説明し、対話をとおして、基地問題の解決について理解と協力を、米側に求める必要があると考え、11月11日から16日まで、訪米した。

知事は、ニューヨーク大学で、辺野古新基地建設問題の解決策を沖縄だけに問うのではなく、日本とアメリカの市民の皆さんが「自分のこと」として捉えていただき、一緒に解決策を考え、太平洋をこえて、つながって、行動する輪を広げていただきたいという思いから、「多様性の力、民主主義の誇り」をテーマに講演会を行い、県系人や米国人など約140名が来場した。

あわせて、国連事務次長、国務省・国防総省、連邦議会調査局、ヒロノ上院議員、プライス下院議員、その他有識者の方々との面談や県系人との交流、メディア取材への対応などを実施した。

(2) 活動内容

ア 面談（計11名）

国連事務次長	1名
連邦議会議員	2名
有識者	6名
連邦政府	2名

イ 知事講演（於：ニューヨーク大学）

ウ マスコミ取材

(3) 日程

平成30年11月11日（日）～11月16日（金）

(4) 訪米団員

知事、知事秘書、通訳、知事公室長、知事公室職員

合計7名

訪米日程

日本時間			米国時間			訪米日程	備考
月日	曜日	時間	月日	曜日	時間		
11/11	日	10:20				羽田空港発 (NH110) (所要時間: 12時間40分)	
						【以下 米国東部標準時間(EST) 日本との時差 マイナス14時間】	
		23:00	11/11	日	9:00	ニューヨーク JFK 空港着	
11/12	月				12:30	打ち合わせ	
					14:00	ニューヨーク大学での講演会	
					16:00	ぶら下がり記者会見 (同行記者)	
					17:00	ニューヨーク県人会等との交流会	
			11/12	月			
11/13	火				9:00	報道番組「デモクラシーナウ!」スタジオ録画収録	
					13:30	日経アジアレビュー社にて個別取材	
					16:00	中満泉事務次長との面談	
			11/13	火			
11/14	水				9:30	ニューヨーク発 (電車Acela Express)	
					13:00	ワシントン着	
					13:00	フリージャーナリスト ドン・カーク氏取材	
					14:00	マイケル・オハンロン研究員 (ブルッキングス研究所)	
					15:30	AFP通信社取材	
					16:30	シーラ・スミス上席研究員 (外交評議会)	
					17:00	マイク・モチヅキ教授との面談	
					18:10	ぶら下がり記者会見	
					18:30	ワシントン沖縄会との交流会	
			11/14	水			
11/15	木				10:30	国務省・国防総省との面談	
					11:30	日本大使館表敬 (杉山晋輔大使)	
					13:00	連邦議会調査局との面談 (マーク・マニン専門官)	
					14:40	メイジー・ヒロノ上院議員との面談	
					16:30	ディビット・プライス下院議員との面談	
					17:00	the Nation 取材	
					17:40	ぶら下がり記者会見	
			11/15	木			
11/16	金				11:19	ダレス空港発 (NH001) (所要時間: 14時間44分)	
						【以下 日本時間】	
		16:03				成田空港着	
		18:30				ぶら下がり記者会見 (都道府県会館)	

3 訪米団名簿

No.	氏名 Name	職名 Position	備考
1	玉城 康裕 Yasuhiro Tamaki	沖縄県知事 Governor	
2	池田 竹州 Takekuni Ikeda	沖縄県知事公室 知事公室長 Director General, Executive Office of the Governor	事務・総括
3	岸本 義一郎 Yoshiichiro Kishimoto	知事特別秘書 Governor's Secretary	知事秘書
4	上原 宏明 Hiroaki Uehara	基地対策課副参事 Deputy Councilor, Military Base Affairs Division	事務・広報
5	銘苺 奈真 Taishin Mekaru	秘書課主査 Supervisor, Secretary Division	通訳
6	國場 智 Satoru Kokuba	基地対策課主査 Supervisor, Military Base Affairs Division	記録・庶務
7	末永 充 Mitsuru Suenaga	辺野古新基地建設問題対策課主任 Senior Staff, Henoko Base Construction Countermeasures Division	記録・庶務

4 活動の概要

4 活動の概要

(1) 知事講演「多様性の力、民主主義の誇り」

ア 日時：平成30年11月11日 14:00～16:00

イ 参加者：約140名

ウ 場所：ニューヨーク大学

エ 概要：辺野古新基地建設問題の解決策を沖縄だけに問うのではなく、日本とアメリカの市民の皆さんが「自分のこと」として捉えていただき、一緒に解決策を考え、太平洋をこえて、つながって、行動する輪を広げていただきたいという思いから、以下の内容の講演を行った。

- 日本の国土面積のわずか 0.6 %しかない小さな沖縄に日本全国の 70.3 %もの米軍専用基地が集中しており、沖縄は、戦後 73 年間も米軍基地の問題と戦い続けている。
- 現在、名護市辺野古で新基地建設を強行しようしている日米両政府と沖縄は対立しているが、これは、反米とか反基地というイデオロギ一的な主張ではなく、これ以上基地はいらないという、生活者のリアルな声である。県民の6割から7割が辺野古新基地建設に反対している。平成 30 年 9 月の沖縄県知事選挙では、新基地建設反対という民意を受けて、相手候補に大きな票差をつけて圧勝した。
- 全ての米軍基地の即時閉鎖ではなく、辺野古の新基地建設という、沖縄県民に対するさらなる負担の増加に反対している。「日米安保は支持する」、けれども「米軍基地は来ないでくれ」という矛盾が、日本の国民の中にもある。その民主主義の矛盾が当たり前のように、沖縄に押し付けられている。
- 沖縄県は、8月31日、辺野古新基地建設に伴う埋立承認を撤回した。これに対して、政府は、本来、国民の権利利益の救済を目的とする行政不服審査法を用いて、撤回の効力を無力化した。政府は、米軍基地を優先するために、法の例外まで沖縄に押し付けている。
- 沖縄県は、辺野古新基地建設の問題を解決するため、沖縄と日本と米国の三者対話を持ちたいと切望している。しかしながら、当事者であるアメリカは、それは「日本国内の問題」だと片付けてしまう。他方の当事者である日本政府は、地位協定などを理由として、沖縄からの苦情を切り捨てている。そして、沖縄からの民意の声は最初から無かったかのように消されていくのが常となっている。基地を作る日本、

基地を使う米国、どちらも責任の当事者であるはずである。その基地を押し付けられている沖縄からの声はどこに届けばいいのか。日米両政府は、民主主義の誠意を持って沖縄と真摯に対話するべきである。そうでなければ、日米両政府と沖縄県民との間に、修復不可能な亀裂が生じてしまうだろう。私は沖縄県知事として、米軍基地が駐留する地域の民意を尊重するよう呼びかけたい。

- アメリカは、沖縄を「日本国内の問題」に閉じ込めているが、実は沖縄の中でもアメリカの民主主義が問われている。膨大な数の軍人が海外の基地に駐留する現実から言えば、アメリカ軍の基地の問題は、アメリカの問題と同等に扱われるべきであり、アメリカの民主主義もまた、国境を越えるべきではないかと考える。
- 保存されるべき豊かな自然環境と互いの友情を、将来の子供達につなげるために正しいと心から信じる声と行動が必要である。みんなが立ち上がれば変化が起こる。変化が大きく早くなるほど、状況は大きく早く変わる。
- 日米両政府が辺野古の新基地建設計画を断念するまで、みんなでぜひ動いていこうではないか。

(2) 中満泉国連事務次長面談

ア 日時：平成30年11月12日 16:00～

イ 場所：国際連合

ウ 面談者：中満泉国連事務次長

エ 概要：沖縄県は、世界の恒久平和の創造に貢献するため「沖縄平和賞」を設けていることや、沖縄をアジアの平和の緩衝地帯にするため、沖縄にアジアのファースト・レディに集まっていたいただき、女性のサミットを開催したいとの話をし、国連の力も貸していただきたいとお願いした。

(3) マイケル・オハンロン氏面談

ア 日時：平成30年11月13日 14:00～

イ 場所：ブルッキングス研究所

ウ 面談者：マイケル・オハンロン氏

エ 概要：玉城知事が、辺野古に新基地を造らせないことを公約に掲げ、沖縄県知事選挙において過去最多得票で当選したこと、沖縄の過重な米軍基地負担

の現状などについて説明を行った。

※ 具体的な発言内容については非公表

(4) シーラ・スミス氏面談

ア 日時：平成30年11月13日 16:30～

イ 場所：外交評議会

ウ 面談者：シーラ・スミス氏

エ 概要：玉城知事が、辺野古に新基地を造らせないことを公約に掲げ、沖縄県知事選挙において過去最多得票で当選したこと、沖縄の過重な米軍基地負担の現状などについて説明を行った。

※ 具体的な発言内容については非公表

(5) マイク・モチヅキ教授面談

ア 日時：平成30年11月13日 17:00～

イ 場所：ワシントン事務所

ウ 面談者：マイク・モチヅキ教授

エ 概要：玉城知事が、辺野古に新基地を造らせないことを公約に掲げ、沖縄県知事選挙において過去最多得票で当選したこと、沖縄の過重な米軍基地負担の現状などについて説明を行った。

※ 具体的な発言内容については非公表

(6) 連邦政府要人面談

ア 日時：平成30年11月14日 10:30～

イ 場所：国務省

ウ 面談者：国防総省 ポール・ボスティ日本部長代行

国 務 省 マーク・ナッパー米国務次官補代理

エ 概要：玉城知事が、辺野古に新基地を造らせないことを公約に掲げ、沖縄県知事選挙において過去最多得票で当選したこと、沖縄の過重な米軍基地負担の現状や、辺野古での軟弱地盤や活断層の可能性が指摘されていることなどについて説明を行うとともに、普天間の早期閉鎖・返還、日米両政府と沖縄で対話する場を設けることなどについて米側の理解と協力を求めた。

※ 具体的な発言内容については非公表

(7) マーク・マーニン氏面談

ア 日時：平成30年11月15日 13:00～

イ 場所：連邦議会調査局

ウ 面談者：マーク・マーニン氏、他3名

エ 概要：玉城知事が、辺野古に新基地を造らせないことを公約に掲げ、沖縄県知事選挙において過去最多得票で当選したこと、沖縄の過重な米軍基地負担の現状などについて説明を行った。

※ 具体的な発言内容については非公表

(8)メイジー・ヒロノ上院議員面談

ア 日時：平成30年11月15日 14:40～

イ 場所：議員会館

ウ 面談者：メイジー・ヒロノ上院議員

エ 概要：玉城知事が、辺野古に新基地を造らせないことを公約に掲げ、沖縄県知事選挙において過去最多得票で当選したこと、沖縄の過重な米軍基地負担の現状などについて説明を行った。

※ 具体的な発言内容については非公表

(9)ディビット・プライス下院議員面談

ア 日時：平成30年11月15日 16:30～

イ 場所：議員会館

ウ 面談者：ディビット・プライス下院議員

エ 概要：玉城知事が、辺野古に新基地を造らせないことを公約に掲げ、沖縄県知事選挙において過去最多得票で当選したこと、沖縄の過重な米軍基地負担の現状などについて説明を行った。

※ 具体的な発言内容については非公表

5 ニューヨーク大学知事講演

- (1) タイトル : 「多様性の力、民主主義の誇り」
- (2) 日 時 : 平成30年11月11日 14:00～16:00
- (3) 参加者 : 約140名
- (4) 場 所 : ニューヨーク大学
- (5) 内 容 :

(島袋准教授による玉城知事の紹介)

皆さん、ニューヨーク大学の東アジア研究所へようこそお越し下さいました。今回、沖縄県知事である玉城デニー知事に「多様性の持つ力、沖縄の民主主義の誇り」というテーマでご講演いただきます。私は、沖縄県の比屋根にルーツを持ちます沖縄県系2世の島袋アンナマリアと申します。こちらニューヨーク大学で日本研究の准教授をしております。最初に、玉城知事について私のほうから簡単にご紹介させていただきます。その後、沖縄に関する短いビデオを上映いたしまして、その後玉城知事にご講演をお願いいたします。玉城知事のご講演の後、私のほうから2つほど知事にご質問をさせていただきます。最後にフロアの皆さんと議論をしたいと思います。

玉城知事は1959年に沖縄県の旧与那城町、現在のうるま市でお生まれになりました。玉城知事は幼少期の頃からロック音楽の影響を受けまして、当時ベトナム戦争の前線基地としての役割を担っていた沖縄における入れ混じった文化を体現する存在となりました。

上智社会福祉専門学校をご卒業後、玉城知事は沖縄にお戻りになりまして、ラジオパーソナリティとなりました。このことが、言葉に繊細な沖縄の幅広い世代の方々にとって理解しやすいコミュニケーションスタイルを確立することにつながりました。その後、そのコミュニケーションの技術を活用しまして、沖縄市の市議会議員として2002年から2005年まで務め、その後2009年から2018年まで衆議院議員としてご活躍なさいました。

今年の夏、翁長前知事が辺野古新基地建設阻止のために戦っていた最中、膵臓がんのためお亡くなりになりました。翁長前知事は生前、自らの後継者として2名の方のお名前を挙げていました。そのうちの一人が玉城デニー知事でした。お名前が挙がっていたもう1名の方が知事選出馬を辞退後、玉城知事は、たちまち県民の支持を得ました。もともと革新派ではなく保守派の流れを汲む政治家であり、辺野古新基地建設に

断固として反対していた翁長前知事の「イデオロギーよりアイデンティティ」という政治哲学を玉城知事は受け継ぎました。翁長前知事は、沖縄県民としてのアイデンティティを強調し、それは歴史的経験のみに基づくものではなく、沖縄県民の日々の生活の中にもあるものだとして、沖縄のイデオロギーの分断を乗り越えました。

玉城知事は、これにさらに多様性という要素を加え、選挙戦では沖縄の多くの若者達の心を動かしました。そしてこの若者達は、普段政治と距離を置く人々を含む沖縄における全ての層の人々に働きかけ、玉城知事への支援に繋がりました。

フェイクニュースや日本政府による対立候補への強力な支援にもかかわらず、玉城知事は、辺野古反対を掲げ40万に近い票を獲得して当選しました。

現在、約4万人もの米軍兵およびその関係者が沖縄に駐留しています。そして1945年以来、何万人もの米国人が沖縄に駐留しています。その意味で申し上げますと、沖縄は米国の歴史の一部でもあり、米国家族や米国民の生活の一部でもあるのです。そして同時に、玉城知事は、我々の知事でもあるわけです。

では最初に、ビデオを上映いたします。

(ビデオ上映)

(島袋准教授)

では次に、沖縄の基地についてです。では玉城知事のご講演をお願いいたします。

(玉城知事講演)

(玉城知事)

ハイサイグスーヨー、チューウガナビラ。ニューヨークの皆様、初めまして。沖縄県知事の玉城デニーでございます。どうぞ宜しくお願いいたします。アメリカ人のように見えますが、英語はあまり話せないなので今日は日本語で話をして、銘苅さんに通訳をして頂きますのでよろしく宜しくお願いいたします。まず、最初に今日の講演の準備には島袋まりあ先生にとってもお世話になりました。まず始めに感謝いたします。ありがとうございます。そして今日、こうやって本当にたくさんの皆さんにお越し頂きました。本当にありがとうございます。

先ほどご紹介にもありましたが、私は国会議員を勤めていた2009年から2018年まで

は3回アメリカに訪問いたしました。今年の9月30日に選挙で当選して、10月4日に沖縄県知事に就任してからはもちろん初めてです。これまでは主にワシントン DCを中心に訪米活動を行っていましたが、今回は「多様性の持つ力・沖縄の民主主義の誇り」をテーマにお話しするために、アメリカでも多様性にあふれている都市ニューヨークを県知事としてアメリカでの活動をスタートする場所を選びました。

沖縄は第二次世界大戦後、73年間も米軍基地の問題と戦い続けています。今、名護市辺野古の新基地建設をめぐり、後戻りできない事態へと追い込まれています。今後どのような手段で埋め立てを阻止していくのか、そのための何か具体的な策があるのか、日本のメディアは新しく県知事となった私の判断に注目しています。

私はここで、なぜ沖縄がこのような状況に追い込まれているのか、日本と米国の安全保障体制の過重な負担をなぜ沖縄だけが背負い続けているのか、皆さんに話をさせて頂きたいと思います。そして、沖縄だけに解決策を問うのではなく、日本とアメリカの市民の皆さんが「自分のこと」として捉えていただき、一緒に解決策を考え、太平洋をこえて、つながって、行動する輪を広げていただきたいという思いで、これからお話をさせていただきます。

さて、私は1959年に、日本の一番南にある小さな島、沖縄に生まれました。私の父は米国人で元海兵隊員、母は日本人です。母は80歳を過ぎて元気です。笑顔のとてもチャーミングな人です。しかし私は父の顔も、出身地も知りません。私がまだ母のお腹にいたときに父が先にアメリカへ帰還することになり、母は私を産んでからアメリカへ渡る約束でした。ところが生まれてからあと、母は渡米を断念し、沖縄で私を育てました。手紙も写真も、母は悔いを残すからとすべて焼いてしまいました。このような形で日米双方の関係を持つ子供たちは少なくありません。しかし私は、幼い頃は外見が違うというだけでいじめにあったりもしましたが、私を実の母以上に可愛がってくれた養母は、差別や偏見が心の傷にならないよう優しく教えてくれました。ですから私は自分の生き立ちを肯定していますし、海兵隊の基地周辺にある飲み屋で働いている女性たちの、食事や洗濯などの世話をするまかないが生活するための仕事だった私の母の姿を知っています。

つまり私にとっての米軍基地とは政治的な問題というよりも、日常生活の延長に見ていたものです。基地を抱えながら生活をしてきたウチナーンチュの現実でもあったわけです。沖縄における多様性は、生きるためのたくましさが必要としながらも、人としてのチムグクル、真心を決して失ってはいけないというアイデンティティとして、

私たち沖縄県民が誇りに思っている魂（マブイ）でもあるのです。

普段のウチナンチュは、兵隊とほとんどもめたりしません。しかし沖縄は今、辺野古で新基地建設を強行しようとしている日本とアメリカの両政府とぶつかっています。この対立は反米とか反基地というイデオロギー的な主張ではなくて、これ以上基地はいらないという、生活者のリアルな声です。細かい点については、今日皆さんに資料をお配りしていますので、どうぞそちらをご覧ください。

辺野古の新基地問題をめぐる沖縄の現状について簡単にご説明いたします。沖縄県の人口は今 145 万人です。現在はハワイと肩を並べるくらいに好調な観光産業を中心に発展しています。県全体からみる基地の関連収入は、わずか 4 ～ 5 % にしか過ぎません。沖縄は基地経済に依存しているわけではないのです。

沖縄の国土面積は日本全体のわずか 0.6 % です。その小さな沖縄に日本全国の 70.3 % もの米軍専用基地が集中しています。圧倒的な集中であるにもかかわらず、日本政府はさらに新たな米軍基地の建設を辺野古で強行しています。これには沖縄県の県民の 60 ～ 70 % が反対しており、翁長雄志前沖縄県知事も、そして私も、新基地建設反対という民意で、選挙では相手候補に大きな票差をつけて県知事選挙で圧勝しています。

沖縄が現在直面している政治問題として、私は全ての米軍基地の即時閉鎖ではなく、辺野古の新基地建設という、沖縄県民に対してのさらなる負担の増加に反対しているのです。沖縄に米軍基地が集中している理由について、日本の政治家や評論家はアジアに近い「地理的優位性」や「戦後の安全保障上のこと」などを理由に挙げています。

しかし、戦後の米軍基地が沖縄に作られてきた経緯を観察すると、米軍が基地建設を試みた 1950 年代に日本本土での反対闘争がすさまじかったことや、かつて防衛大臣を担った方の発言にあるように「九州でも西日本でもいいが政治的に沖縄」というように言っています。それは、米軍にとって都合がいいのではなくて、日本政府にとって沖縄に置くほうが手っ取り早い、日本国民からの反対を避ける意味でも基地が集中している沖縄しかない、という考えにこだわっているとしか思えません。

残念ながら「日米安保は支持する」、けれども「米軍基地は来ないでくれ」という矛盾が、日本の国民のなかにもあります。しかしその民主主義の矛盾が当たり前のように押し付けられているのが沖縄なのです。

沖縄県は、8月31日辺野古の新基地建設に伴う埋め立て承認を撤回しました。これに対して政府は国民の権利利益の救済を目的とする行政不服審査法を用いて、撤回の効力を無力化しました。本来このやり方は、国民が政府と闘うために使う権利なのですが、日本政府は辺野古の新基地建設工事を再開させるために、政府が私人になりまして法の趣旨を捻じ曲げています。沖縄県は法治国家にあるまじき行為だとして強く批判しています。米軍基地を優先するために、政府は法の例外規定まで沖縄に押し付けているわけです。

しかし、こうした問題は日本だけにとどまりません。アメリカも当事者です。沖縄県は、沖縄と日本と米国の三者対話を持ちたいと切望していますが、アメリカは沖縄に対して、それは「日本国内の問題」だと片付けてしまいます。沖縄がアメリカに直接米軍基地に関する苦情を訴えると、アメリカは苦情を日本政府へ回します。

そして日本政府は、地位協定などを理由として、沖縄からの苦情を切り捨てるわけです。このように、沖縄からの民意の声は最初から無かったかのように消されていくのが常となっています。非常に残念ですが、この民意の声をしっかり受け止め、私あるいは私たちが責任を持って解決しよう、と主張する政治家は、アメリカにも日本にもいません。こうした国際社会の下で、沖縄県民はいったいどのようにして声を上げることができるのでしょうか。

基地を作る日本、基地を使う米国。どちらも責任の当事者であるはずですが、その基地を押し付けられている沖縄からの声はどこに届けばいいのでしょうか。民主主義のあるべき姿を私たち沖縄県民はどこでつかむことができるのでしょうか。民主主義の尊厳をアメリカと共に分かち合いたいという沖縄県民の心からの願いはどのようにすれば繋がるのでしょうか。

しかし、政府の扉と法律の門は閉じつつあるという厳しい現実には直面しています。沖縄はいったいつまで、政府の扉の前で待たなければならないのでしょうか。いったいつまで、法律の門の前で待たなければならないのでしょうか。そうした沖縄に対する扱いを「まるで植民地のようだ」と反発する沖縄県民も少なくありません。沖縄の立場から見た場合、日本は法治国家であるという政府のコメントに対して「自作自演」といわざるを得ないのです。そうでないとするならば、民主主義の誠意を持って沖縄と真摯に対話するべきです。

さて、第二次世界大戦後、アメリカは沖縄を「太平洋の要石～キーストーン」と呼び

ました。米軍の軍事戦略において沖縄は、太平洋から東アジアへの鍵であるという意味です。しかしこれまで説明してきたように、沖縄を常に民主主義からも法律からも例外的な存在におき続けていくなれば、その鍵の石は、沖縄から激しい反発が飛び散ってゆく、「パンドラの箱」の鍵に変わってしまうかもしれません。そうなれば日米両国と沖縄県民との間に、修復不可能な亀裂が生じてしまうでしょう。翁長雄志前知事も、沖縄の民意をおろそかにすることは、安全保障体制を敷く日本とアメリカの両国の政府に対して大きな反発が起こりうるかもしれないと警鐘を鳴らしていたのです。

私は沖縄県知事として、米軍基地が駐留する地域の民意を尊重するよう呼びかけたいのです。日本は、アメリカにとってもっとも重要な同盟国のひとつですが、一方で沖縄を民主主義の手続きから排除するという姿勢を支えています。私が考えますに沖縄にとっての安全保障体制は、右か左かというイデオロギー的な政治問題ではなく、日常生活に根ざしたリアリティーなのです。だからこそ翁長雄志前県知事は「イデオロギーよりアイデンティティ」だと主張したのです。つまりイデオロギー的・反米的なことではなく日常生活の中から国の政治について考えるという民主主義の魂が沖縄に根付いているわけです。

沖縄県民は、日米両政府から矛盾を押し付けられましたが、その矛盾をチムグクルで包みこむ多様性へとウチナーンチュは変えてまいりました。その一例となるのが、本島南部の糸満市にある平和の礎です。沖縄戦においては、民間人約 10 万人を含む 20 万人以上の方々がなくなりました。平和の礎には国籍を問わず、亡くなった全ての人々の名前が刻銘されており、新たに確認された方の名前も追加で刻まれています。これは沖縄の多様性を反映している大切な事業の一つです。私の母の父親、つまり私の祖父と 2 人の叔父の名前もそこに刻まれています。

このように、苦い苦しみの経験を含めて平和への思いを大事に育んできたからこそ、沖縄県民は日米両政府が強行する辺野古新基地に反対を主張するのです。新基地はいらないと主張しているわけです。アメリカではおそらく沖縄の問題はあまり報道されない、あるいは知られていないという現実があるかもしれません。しかし私はこのことをとても不思議に思います。なぜなら 1945 年の沖縄戦から現在に至るまで、多くの数のアメリカ人が沖縄に駐留してきているからです。ですから実際には、アメリカと沖縄の関係は非常に深いといえます。この深い関わりの中から私も生まれてきたのです。政治家が沖縄の運命を決めるのかもしれませんが、その沖縄を知っているのは政治家よりも、多くのアメリカの元軍人や軍属やその家族なのではないでしょうか。

沖縄のダイバーシティというのは私のような存在であり、米兵と結婚して渡ってきた、いまアメリカにいらっしゃる沖縄の女性たちであり、そして親から沖縄の魂を受け継いだ子供たちであり、そして、沖縄に触れてきた数多くの軍人・軍属なのです。私はこのダイバーシティを、誇るべき民主主義の力にぜひ変えて欲しいのです。

米軍が沖縄に来て 73 年になります。米軍はせめて、キーストーンである沖縄の声ぐらい聞くという敬意を払って欲しいと思っています。アメリカは沖縄を、「日本国内の問題」に閉じ込めていますが、実は沖縄の中でもアメリカの民主主義が問われているのです。ですから私は、米国政府をはじめ、沖縄に駐留したアメリカ人、そしてそのご家族の方々にも、沖縄の問題を自分の問題のこととして考えて欲しいのです。膨大な数の軍人が海外の基地に駐留する現実から言えば、アメリカ軍の基地の問題は、アメリカの問題と同等に扱われるべきであり、アメリカの民主主義もまた、国境を越えるべきではないかと私は考えます。

保存されるべき豊かな自然環境と互いの友情を、将来の子供達につなげるために正しいと心から信じる声と行動が必要です。お互いの沖縄のために、皆さん立ち上がってぜひ行動してください。貴方の国の政府に、アメリカの民主主義の誇りを沖縄にも届けるようにどうぞ要求してください。沖縄県民に残された時間はあまりありません。しかし、みんなが立ち上がれば変化が起こります。変化が大きく早くなるほど、状況は大きく早く変わります。

日米両政府が辺野古の新基地建設計画を断念するまで、みんなぜひ動いていこうではありませんか。アメリカヌグスーヨー、トゥマテー、ナイビランドー！ マキテー、ナイビランドー！ マジュン、チバティイチャビラナヤーサイ！ イPPER、ニフェーデービタン、有り難うございました。

(島袋准教授との質疑応答)

(島袋准教授)

知事、いっぺーにへーで一びる。ありがとうございます。私のほうから知事にご質問をさせていただく前に、知事のご講演の内容について簡単に概要を振り返りたいと思います。その後フロアの皆さんからのご質問をいただきたいと思います。

